

第1班C

『ヨーロッパ近代生活絵引』編纂共同研究

(1) 共同研究員名

研究班代表：鳥越輝昭

共同研究者：小松原由理 熊谷謙介 ステファン・ブッヘンベルゲル

(2) 研究目的

18世紀にヨーロッパ広域で描かれるようになった風俗画（広義）を資料として、都市民の生活を中心に社会史的・比較文化的視角から編集・解説を試みる予定である。今期末に18世紀ヨーロッパ（仏・独・伊・英語圏）に関する生活絵引（全2巻の予定）の第1巻を刊行する計画である。

(3) 活動経過（鳥越）

非文字資料研究センター長から、ヨーロッパに関する「生活絵引」を編纂してほしいとの依頼を受けたのが2011年の冬だった。センターでは、すでに『日本近世生活絵引』と『東アジア生活絵引』とを刊行しており、今後は対象をヨーロッパにも拡大したいとのことだった。

少し考えたのち、新しい絵引編纂はつぎのような方針で進めることにした。

- ◆「ヨーロッパ」は、フランス語圏・ドイツ語圏・イタリア語圏・英語圏の範囲に留める。これらの地域が、社会的・文化的に近代ヨーロッパのなかで中心的位置を占めてきたからである。
- ◆絵引の素材には、同時代に描かれた「広義の風俗画（含版画）」を利用する。「広義の風俗画」とは、ねらいが風俗を描くことになくても、結果として風俗を描き出すことになった絵画、という意味である。
- ◆時代については、まず18世紀を取り扱う。理由は、それまで都市ヴェネツィアについて調べていた過程で、18世紀の都市景観や都市民を描いた少なからぬ作品に出会っており、絵引の編纂に十分な資料が見つかるだろうし、資料は扱いに戸惑うほど多くないだろう、と推測したからである。以上のような構想に基づいて、この共同研究に最適な方々に参加をお願いし、さいわい快くお引き受けいただくことができた。

この共同研究を遂行してきたメンバーとその専攻領域は、下記のとおりである（アイウエオ順）。

◆熊谷謙介 フランス文学・表象文化論

◆小松原由理 美学、前衛芸術思想史

◆ステファン・ブッヘンベルゲル 比較文学、ドイツ文学、ミステリー小説・漫画の研究

◆鳥越輝昭 比較文学・比較文化史

これらのメンバーが、つぎのように言語文化圏を担当してきた。

- ◆熊谷 フランス語圏
- ◆小松原 北ドイツ語圏
- ◆ブッヘンベルゲル 南ドイツ語圏（含オーストリア）
- ◆鳥越 イタリア語圏と英語圏

ブッヘンベルゲル氏には、共同研究開始の翌年（2012年度）から参加いただいた。メンバーのこの増強は、ドイツ語圏を南北に二分し、南ドイツ語圏（南ドイツとオーストリア）を一括して取り扱う方がよいと考えたからである。

18世紀ヨーロッパ都市生活絵引に関するこの共同研究は、2011年度初めに開始され2013年度末に完了する予定のものである。研究の過程を略述する。

- ◆2011年度は、18世紀ヨーロッパの都市生活を描き出した図書資料（図版を載せるもの）を集めるのを主要目的にした。共同研究の出発時点では非文字資料研究センターに該当資料は皆無だったが、この1年間で、つぎの段階に進む手がかりとなる資料を集めることができた。
- ◆2012年度には、図書資料の収集に加えて、熊谷・小松原・鳥越が、それぞれの担当地域に出張して資料の収集等をおこなった。
- ◆2013年度は、絵引に使用する図版の絞り込み、およびその分析を主要目的として、共同研究を継続中である。また、この年度にはブッヘンベルゲルが担当地域に出張して資料の収集等をおこなった。

いずれの年度にも、年に2回ほど公式に研究会を開いたが、そのほかに非公式な話し合いを数回おこなった。

2014年1月現在で、研究がどうなっているかについて略記しておく。

- ◆この生活絵引は、18世紀ヨーロッパの代表的な都市の公空間を扱うことにした。公空間とは、市門、広場、街路、水辺のような場所である。
- ◆取り上げる都市は、パリ、ベルリン、ウィーン、ローマ、ヴェネツィア、ロンドンにほぼ定まった。
- ◆パリ、ローマ、ヴェネツィア、ロンドンについては、絵引に使用する図版がほぼ定まった。

上記3点に関連して少し補足しておく。

絵引の取り扱う対象を「都市」に定めたのは、ヨーロッパの社会的・文化的特徴が都市によく現れていると考えたからである。そして、代表的な都市の市門・広場・街路・水辺などの様子をヨーロッパ横断的に比較することにより、共通性と相違とが浮かび上がるのも興味深い。

絵引に取り上げる都市として、ナポリなども検討したが、取り上げないことにした。たとえばナポリの場合には、図版資料の利用が不便だからである。

一般にドイツ諸都市については、多数の都市景観図（そのなかに「風俗画」が含まれる）は見つか

らなかった。その点で、北ドイツを担当いただいた小松原氏と、南ドイツ・オーストリアを担当いただいたブッヘンベルグ氏には苦労をおかけした。これは、出発時点でのわたくしの認識不足に起因している。しかし、これも共同研究の結果わかったことであるので、成果のひとつと強弁できるかもしれない。

研究の出発時には予想しなかった嬉しい誤算もあった。たとえばイタリアの都市景観図については、イタリア本国よりも、英国の大英博物館などでデジタルアーカイブ化がはるかに進んでおり、これにより共同研究が容易になった。フランスについても、カルナヴァレ美術館でパリ市を描いたさまざまな絵画がデジタルデータ化されており、共同研究を進める上で有益だった。

(4) 研究成果

◆フランス語圏（熊谷）

「またもパリについての本！」19世紀中盤に出版されたエドモン・テクシエ『タブロー・ド・パリ』の冒頭の言葉である。「19世紀の首都」（ヴァルター・ベンヤミン）ことパリについては、19世紀に限らず現在に至るまで最も多くのページが割かれてきた都市といっても過言ではない。汗牛充棟の感があるパリ研究に果たしてこれ以上付け加えるべきものがあるのか——、このような不安も感じつつも今回の共同研究に参加したのは、まずヴェネツィアやウィーンなどの都市表象との比較から新しい視点が提出できるのではという期待からであり（パリは単独で論じられることがほとんどである）、また都市景観図や風俗画を狭義の美術史的アプローチではなく、文化史のアプローチによって分析することには、私が本業とする文学研究・表象文化論からも貢献することがあるのではないかという想いからであった。

今回の分析対象である18世紀絵画、厳密に言えば1789年までの革命前の絵画については、膨大な数の都市景観図が存在している。しかし、日本で入手できた研究資料、また2012年2月のフランス渡航の折に収集したカタログ等（とりわけ Alfred Fierro et Jean-Yves Sarazin, *Le Paris des Lumières: D'après le plan de Turgot (1734-1739)*, RMN, 2005（『啓蒙期のパリ』）と、Françoise Besse et Jérôme Godeau, *Tableaux parisiens: Du Moyen Age à nos jours, six siècles de peinture en capitale*, Parigramme, 2005（『タブロー・パリジャン』））を分析した結果、見えてきたのは、複数の研究に取り上げられている定番とも言うべき景観図があること、またその多くがカルナヴァレ美術館という、パリの歴史資料の多くを保有している美術館に所蔵されており、デジタル資料も多く備えているということであった。今回、ヨーロッパ生活絵引の第1巻ということもあり、比較的入手しやすく、分析も少なくない作品群の分析から始めるという方向性が決まった。

これを踏まえて、2013年3月に非文字資料研究センターの予算で現地調査を行って都市風景の変遷を確認するとともに、資料の補足などを行った（「フランス都市風景の歴史の変遷を探る」ニューズレター『非文字資料研究』第30号、p.16-17）。現在、「水辺」や「広場」といったテーマに沿って取り上げる対象を確定しており、より画質の精度の高い図版の利用ができるかどうか、カルナヴァレ美術館と交渉中である。

◆北ドイツ語圏（小松原）

18世紀ドイツの人々の生活や暮らしが描かれた絵画作品を探し当てることは、当初想定していた以上に難しい作業となった。もちろん、南部ヨーロッパ、特にイタリア・ヴェネツィアを中心として当時流行したいわゆる都市景観図（Vedutismo）とその技術を持つ画家たちが、ドイツ北西の強国ドレスデン等に多数招かれており、他都市に遅れながらも見事に咲き誇ったその都市文化の繁栄を描かせ記録させたものは残されているわけで、なかでもベルナルド・ベロット（1721-80、「カナレット」とも呼称）が描いたドレスデンとその郊外の街並みであれば企画作品集は多く残されてはいた。しかし、それですでに幾度も試みられた18世紀ドイツの視覚資料の再編集になりかねないという思いもあり、また新たにドイツ人画家によるドイツの都市景観図というものを使用したいという思いもあった。イタリア、フランスと比較し、そもそも素材となる資料の絶対数も少ないうえに、ドイツ人画家となると、日本において文献を見出すのも、画像を検索するのも限界があった。数少ないながらも、ある程度機能してくれたのは、マールブルク大学の画像アーカイヴのオンライン検索であり、これはキーワードに都市名や執筆年、画家名や所蔵先を入力するとオリジナルのコピー画像をダウンロードすることができた。ただし、そもそも所蔵先がわからない作品も多く、実際はある程度作品名が絞られてから所蔵先を見出すのに便利なサイトであるということが判明した。

そこで、2013年8月に非文字資料研究センターの予算で現地調査に行かせていただいた結果、初めてある程度の感触を得ることができた。具体的に訪問したのはハンブルクとベルリンであり、ハンブルクでは特にハンブルク市歴史博物館における18世紀当時の人々の生活の再現模型と、衣装や小物などの展示は有効なビジョンを齎してくれた。他にもDiederich Lemkus and F. Ladominによる大型な18世紀のハンブルク都市図（City Prospect）からは、港町ハンブルクらしい最古の取引所をめぐる人々の具体的な取引の姿や積荷所でのやり取りの細部が描かれており、当時の北ドイツの豊かさを知る上で、重要な資料となった。そのうえで、独自の復興の歴史が極めて興味深く、しかしこれまであまり独立した企画として取り扱われることのなかった都市ベルリンに残された18世紀の画像資料の収集に努めた。滞在時にドイツ歴史博物館でフリードリッヒ大王展と文化フォーラムで風俗画家ダニエル・ホドヴィエツキー特別展が開催されていたのも幸運であった。今後は、収集した視覚資料や文献をもとに、18世紀ベルリンの都市形成の過程とその記録としての絵画が有機的に結びつくような画像選定を急ぐつもりである。末尾ながら、20世紀、21世紀とさらに注目が集まる都市ベルリンに特化することで、さながら考古学的に新たな視点が得られるのではないかと期待している。

◆南ドイツ語圏（含オーストリア）（ブッヘンベルゲル）

ミュンヘン

ミュンヘンは18世紀にはまだ選帝侯の居城都市であり、大都市への変化は萌しただけであった。大都市化の加速は、ナポレオンの恩恵によりバイエルン王国の首都となる1806年を待たねばならなかった。このことにも原因があるのかもしれないが、18世紀のひとびとの生活を調べることのできる、ミュンヘン市を描いた同時代の画像資料は比較的乏しいのである。18世紀にはいまだに、絵画の眼目はなによりも宗教画にあったのだ。これは、バンベルクやレーゲンスブルクなど、他のバイエルンの都市にも当てはまる。市民生活を見ることのできるミュンヘン市のポートレートが増えるのは

19世紀に入ってからである。

とはいえ、当時の傑出した都市景観画家、ベルナルド・ペロット（1721-80、「カナレット」とも呼称）は、ミュンヘンに滞在していた1761年に、ミュンヘン市の景色を3つ、すなわちニュンフェンブルク城の様子をふたつとイーザル川の右岸から市を覗いたパノラマをひとつ、絵にしている。

ミヒャエル・ヴェーニング（1645-1718）の銅版画は、ミュンヘン市の生活のありさまを実に詳細に見せてくれる。彼は4巻にわたる主著『バイエルンの歴史と地誌』（1710-26）で、ミュンヘンの4つの財務庁や、城や僧院などの建物も含めたブルクハウゼン、ランズフート、シュトラウビングなどの地のありさまを、およそ千もの銅版画に録したのみならず、景観図や戦闘図をも版画に刻した。ミュンヘン市自体の景色はそのうち25にのぼる。

ウィーン

同じ時代のウィーン市のポートレートは比較にならないほど多い。ハプスブルク帝国の首都として、18世紀のウィーンはミュンヘンよりもはるかに重要であり、人口も多く、文明も進んでいたからである。特筆すべきは、ミュンヘンに旅する前の1759年から1761年の間にペロットが描いた13の景観図である。

ウィーンが都市として遂げた発展のありさまをとりわけよく伝えているのは、『居城都市ウィーン』に収められた、カール・シュッツ、ヨーハン・ツィーグラ、ラウレンツ・ヤンシャの57の手彩色銅版画（1779-98）である。これらの銅版画は、当時大いに人気を博した。

バロック時代のウィーンの様子は、言うまでもなく、もっと早くから銅版画に録されていた。例えばヨーゼフ・エマヌエル・フィッシャー、ヨーハン・アーダム・デルゼンバッハの手になる1719年の諸作品においては、当時の貴族文化が前面に出ている。以上2種類のコレクションにより、成熟した貴族社会からますます都市性を増してゆく社会へとウィーンが変遷するさまが、良く迎えられるのである。

◆イタリア語圏と英語圏（鳥越）

わたくしは18世紀の英国文学を読むことから研究を始め、途中から近代の英仏独伊語圏に見られるヴェネツィアの表象史を研究し、近年になってローマの表象史も研究するようになった者である。したがって、共同研究開始以前から18世紀のヴェネツィアの景観図や風俗画にはかなり親しんでおり、ローマとロンドンについても多少の都市景観図や風俗画を見たことがあった。しかし、これらの都市生活の様子そのものを研究対象にしたのは、この共同研究が初めてで、そのこと自体が新鮮だった。

イタリアの都市生活を研究対象にするにあたって、当初、ローマ、ヴェネツィア、ナポリの3都市を候補にした。18世紀のヴェネツィアについては、多数の「風俗画」（広義）が描かれたことを知っていたからであり、18世紀のローマについても少なからぬ「風俗画」が描かれたことが推測できたからである。事実、その後の調査で、ヴェネツィアとローマは、18世紀のイタリア都市のなかで、もっとも多数の都市景観図（そのなかに「風俗画」が含まれる）が描かれた都市であることが判明した。

ナポリは、当時イタリア最大の人口を持ち、古典文学の記憶との結びつきが豊かで、外観・生活そ

のものが魅力的な都市だったから、やはり多数の景観画が描かれた。しかし、残念ながら、ナポリに所蔵されているこれらの絵画も、「グランドツアー」の土産として英国に所蔵されるようになった絵画も、多くは個人蔵であり、美術館に所蔵されている場合にもほとんどデジタル化がなされていない。それゆえ、絵引の図版候補から外さざるをえなかった。

ヴェネツィアについては、カナレット（ジョヴァンニ・アントニオ・カナール、1697-1768）による多数の景観図が英国の王室コレクションや大英博物館に所蔵され、デジタル化されたかたちで利用可能であることが分かった。また、ガブリエル・ベッラ（1730-99）の多数の風俗画を所蔵するクエリーニ・スタンパリア博物館（ヴェネツィア）が、自由に写真撮影をさせてくれるほか、デジタル画像も利用させてくれるのが、ありがたい。

ローマについては、この時代の各所の光景を10巻230点に及ぶ版画に残したジュゼッペ・ヴァーヂ（1710-82）の作品集を、良質のリプリント版で入手できた。また、その弟子だったピラネージ（1720-78）が残したローマ景観画集も入手できた。

ヨーロッパの英語圏については、当初からロンドンに代表させることにしていた。ロンドンは、当時ヨーロッパ最大かつ最先端の都市で、世界の富の多くを吸収している興味深い場所だったからである。ロンドンについては、大英博物館とロンドン市博物館に所蔵されている「風俗画」のデジタル画像が利用可能なので、ありがたい。

上記の資料を中心に検討を加えて、ヴェネツィア、ローマ、ロンドンの3都市について、絵引に使用する「風俗画」をほぼ定めることができた。現在は、使用図版について解説・部分名称等の草稿を作成中である。

(5) 今後の課題と展望（鳥越）

今後の課題は、18世紀ヨーロッパ（仏・独・伊・英語圏）に関する生活絵引を作成・刊行することである。

当初、この絵引は2013年度末の刊行を目指していたが、資料収集についても、具体的方法論の策定についても、いわば零からの出発だったので、結果として進行が遅れ、2014年度の刊行を目指し、目下、草稿の執筆に取りかかっている。

また当初は、18世紀ヨーロッパについて、屋外の公空間を取り扱う絵引に続いて、室内の私空間を取り扱う2巻目を編纂する計画を立てていた。しかし、調査の結果、ヴェネツィアを除くと、この面に関する十分な資料は入手できないことが判明したので、2巻目の編纂は取りやめることとした。

次期（2014年度～2016年度）には、18世紀のヨーロッパ生活絵引編纂に際して経験した資料の収集・分析の方法を生かしながら、19世紀前期（フランス革命～1870年頃）のヨーロッパについて、公空間を扱う「風俗画」資料を収集し、分析を加えて、絵引の刊行を目指したい。

「ヨーロッパ」の範囲は、今期とおなじく、フランス語圏、ドイツ語圏、イタリア語圏、英語圏を指すものとし、取り上げる都市としては、パリ、ベルリン、ミュンヘン、ウィーン、ローマ、ヴェネツィア、ロンドンなどを考えている。

使用予定の主な資料は、この時期に作成された絵画・版画のうち、それぞれの都市の建築物、広

場、街路、水辺、公園などを、そこに集まる人々とともに描き出している作品である。

建築物・広場・街路などの様子を、ヨーロッパ横断的に比較検討することにより、共通性と相違とを浮かび上がらせて、当時のヨーロッパの生活への洞察を得ることを期待している。